

生から死への間

死生学の基礎づけには、「生命とは何か」、「人間の生と死をどのように意味づけ理解するか」という根本的な人間理解の問題を避けて通ることはできません（『死生学』（東京大学出版会、2008）。これは、私たち人間は生まれた時から死ぬことがわかっている存在ということから生じる必然だともいえます。どうせ死ぬのだから何をしてもいいとか、好きなことだけしたいと思うこともできるかもしれませんが、私たち人間は、私だけで生きることはできません。私たちを取り巻く世界には、他の人々や動植物、生まれてきた社会や時代などさまざまな要素があつて、それらとのかかわりの中で私たちは自らの存在を位置づけている、あるいは位置づけられているからです。ですから、「現代の実践的な諸問題と関連づけながら、古今東西の哲学や宗教思想を検討し、新たな思考法を探究していかなくてはならない。生命観や進化に関する新たな科学的知見の哲学的、思想的な意味を問い直すことも重要である。環境倫理をめぐる問題、人間の生命と動物や植物の生命の関係をめぐる問題、戦争や刑罰をめぐる実践哲学的問題なども守備範囲である。」（「刊行にあたって」同書）といわれます。

こうした人間の在り方は、「社会的人間」としてしばしば表現されます。この社会的人間というのは、つまりは「かかわりの中で」人間が生きているということです。生きることに困難さを感じたり、行き詰まったりするのは、まさにこうした“関係”に対する困難さであるということも可能です。病気で苦しみ、老いを嘆くときでさえ、自分だけのこととして考えきれないので、悩みは深くなっていくように思います。

死は生に意味を与えるということについては、今までも述べました。手術をしても手遅れという状態で胃がんが見つかった塩崎均近畿大学学長は、新聞のインタビューで「一度は死を覚悟することで何か変わったところがありますか」という問いに対して、次のように答えました。

これまで生きてきたことの一つ一つの意味付けができるようになりました。これから先のことも一つ一つ意味付けをしながら生きていきたいと思っています。生きることがすごく楽になりました。言い換えれば、あまり考えなくなったのかもかもしれません。（「医師として、学長として3」『産経新聞』2014年4月23日夕刊）

一生

板橋春夫さんは、医療人類学者の波平恵美子さんの生命観についての言説から、「生命」と「いのち」の相違について考察しています。

波平恵美子によると、現代医学の発達は「閉じられた限定された生命体」としての生命観と「開かれ連続する生命体」という生命観を生み出したと言う。「閉じられた限定された生命体」という考え方は、「生命」は個体内に閉じ込められており、唯一無二で代替がきかない存在という認

識である。医学はこの「閉じられた限定された生命体」という生命観にその基本的な理論の枠組みを置いており、人間の身体を1つの完成された統合体とみなすのである。そのために病気はその統合性が乱された結果と考えた。一方の「開かれ連続する生命体」は個体の枠を超えて他の個体と理論的には無限に関連しており、決して個体に閉じ込められないという生命観であり、伝統的な生命観の1つであるアニミズム（未開社会において動植物をはじめ無生物に至るすべてのものに靈魂が宿るとする信仰）と類似し、「いのち」の考え方にきわめて近いものであると述べる。（板橋春夫「1生命観と通過儀礼」『日本人の一生』八千代出版、2014、4頁）

つまり、医学的な見地から「命」が言われるとそれはその個体の「生命」のことであつて、その「いのち」がなくなるとは、その個体が死するということになります。しかし、「いのち」と表記されるような「命」には、靈魂（あるいは引き継がれていく「命」というような意味が含まれているので、「生命」よりはより広範な概念となります。

板橋さんは、たとえば「これまでのいのち」と言うときには、寿命・一生・生涯というだけのことでなく、運命あるいは死期というような意味合いが含まれていて、その背後には人間の理解を超える自然の力が横たわっていることを人間は察知していると、先行研究を踏まえて述べています。

その他にも「いのち」は動植物や自然についても用いられ、その使われ方から様々な捉え方が「いのち」にはあるということが分かります。

確かに人が生まれて死ぬ間のことは、「一生」であり「生涯」であるのですが、そこには「生きてきた期間」ということだけを意味しているのではないと感じられます。「何のための人生だったのか」「どう生きてらいいのか」というような独白には、人生すなわち人の一生をまさに意味付けるものの希求があり、それは、決して「私だけで生きていける」という一生ではないことを示しています。

「袖振り合う（振れ合う）も他生（多生）の縁」。道のいきすがりに、袖が振れ合うというような、偶然でほんのささやかな出会いであつても、それは前生からの縁で起こるという考え方です。だから、人との縁・絆を大事にしたいというような意味でしょうか。

仏教の説く輪廻転生（生まれ変わり）という教説からすれば、私の「今」はそれ以前の私の「多くの生＝多生」の表れですから、人との縁はすべて単なる偶然ではなく、深い因縁によって起こるものということになります。こうしたいのちといのちのかかわり合いには、仏教的な考え方が反映されていると考えるわけですが、日本人にとって、このようないのちのかかわり合い、あるいは生まれ変わるということは、祖先崇拝との関連でも知られてきました。死者の靈魂は祖霊化してから（カミ・ホトケ）、ある期間を経て、子孫の誕生に際して生まれ変わるという循環構造を持つ生死観です。